

「神々の子」(アンブローズ・ピアス)

そよ風の吹く麗らかな日、北軍の軍團が南軍部隊を追尾して進んで来て、森林を抜けると、前方に広い原野が出現した。軍團は停止した。一マイル前方の小高い丘の頂に沿つて石垣が左右遙かに續いてをり、その背後に生垣があつて、更にその背後に木立がある。前進を續けるには、木立の間には何かがあるのかをまづはどうしても確かめねばならぬ。原野には敵の大部隊の後退の跡が示されてをり、その敵が林間に潜んで銃砲を向けてゐるかも知れず、それを知らずに前進すれば味方は甚大な損害を被りかねない。

軍團長が馬に跨り雙眼鏡を覗いて前方を見やつてゐると、味方の隊列の中から白馬に跨る若い將校が早驅けでやつて來た。見てゐた者達は思ふ。敵に狙はれ易い白馬に乗り、しかも目立ち易い綺羅びやかな禮装を纏ふなんて、愚かな奴だ。だが、實に眉目秀麗だし、何と無造作に、それでゐて何と優美に手綱を裁いてゐる事か。將校は軍團長の親しい知合らしく、敬禮をして

から何かを申出てゐる。軍團長は許したくない様子だ。が、二人の會話はすぐに終り、將校は丘の頂に向けてまつしぐらに馬を進めた。

背後の味方は皆張り詰めた氣持でそれを見た。敵が木立に潜んでゐるかどうかを確かめるには、結局は接近するしか手立がないが、それによる味方の損害を避けるべく、將校はただ一人死地に赴かうとしてゐたのだ。「自分にすべてをやらせて下さい」と、勇敢な彼、自己犠牲を厭はぬ「この軍隊のキリスト」は申し出たのである。今しがた彼を嗤つた者達は悔いた。ああ、一度でも振向いて我々の「償ひの氣持」を知ってくれたら。彼等は將校の「勇氣と獻身の引力」に感じ入り、「息をこらし、胸をどきどきさせて」見守つた。

とどの詰り、將校は敵の「沈黙の陰謀」を發くが、自ら標的となつて銃彈を浴び、最後にサーベルで空中に弧を描いて、戰友への、この世への、後の世の人々への合圖の身振りをして、死と歴史への、英雄の挨拶をして死ぬ。味方は感極つて、喊聲を上げて突撃する。最後はかう結ばれてゐる。ああ、何と夥しい「無用の死」か！「あの氣高い魂」は「虚しい獻身」の苦い思ひを味はずに濟む事が出来たのであらうか。「ひとつの例外」の行爲によつて、「神の永遠の計畫」の冷酷な完成を大いに毀損する事になつたのであらうか。

ビアスは「神の永遠の計畫」を何處迄も非情冷酷なものを見た。全ての人生は、非情冷酷な宇宙に於ける「途方もない冗談」でしかないと思つた。が、彼は同時に、戦ふ男達の中に、R・P・ウォーレンが名著「南北戦争の遺産」に於て云ふ、「人間の尊嚴の可能性」を、「悲劇的な尊嚴」の證しをも見た。勇氣や規律や忠誠心といふ古來變らぬ軍人の美德を、彼は生涯稱賛して已まなかつたのである。

然るに、南北戦争後のアメリカでは、マーク・トウエインが「金ぴか時代」に描いた様に、拜金主義や政治腐敗が横行し、さういふ祖國の爲體にビアスは甚く幻滅して、かつての激戦の地をめぐる旅に出、ウエスト・ヴァージニアの南軍兵士の墓地を訪れ、「死者の野營地」なる一文を草して、「誠實にして勇敢な敵兵」の見事を稱へ、「劍の時代から口舌とペンの時代」に墮落した祖國を痛罵し、一九一三年、七十一歳の時、次の様な手紙を遺して動亂のメキシコに旅立ち、消息を絶つた。「私がメキシコで石壁の前に立たされ、滅茶苦茶に撃たれて死んだと噂に聞く事があつたら、どうか解つてほしい、そいつはこの世におさらばするかなか結構な方法だといふのが私の考へだといふ事を。老齡や病氣で、或は地下室の階段を轉落して死ぬよ、餘程ましです」。

(猪狩博譯、「ビアス選集」第一卷、東京美術)